

教育長様

校番 011 福山誠之館 高等学校長

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校
令和元年度 報告書**

1 研究の概要

研究の目標（※計画書に記載したものを再掲）

高校生活で生徒に身に付けさせるべき「資質・能力」の評価方法を研究し、探究との関わりを意識することで、「総合的な探究（学習）の時間」のカリキュラムによって「資質・能力」の伸長を図る。

研究内容（※対象、時期、方法を含む）

○総合的な探究（学習）の時間等における「探究的な学習」の充実について

「探究的な学習」を充実するべく、教務研修部に所属するカリキュラムデザインチームを中心として、年間のカリキュラムの見直しを行った。学年・教科を横断したチームのメンバーが、週に1度の会議において、1年次「産業社会と人間」2年次「誠之ナビ」3年次「誠之ゼミ」の指導案等の協議を行い、学年会や担任会にて提案をして周知した。各学年の取組を理解した上で、担当学年の指導に生かすことができ、3年間の探究のスパイラルを意識したカリキュラム改善ができた。

特に、3年次でのゼミの指導体制については、長年の懸案事項であったが、チーム会議の中での気づきをヒントに変更を考えている。「探究的な学習」に向けた計画を協議する際に、いわゆる文系の教員と理系の教員では、探究のスパイラルのどの部分に時間をかけるかが大きく異なっていることがわかった。文系の教員は、仮説設定後の文献収集や分析の部分に多くの時間をかけたいと考えているのに対し、理系の教員は、先行研究の分析を丁寧に行い、仮説を設定するところまでに時間をかけることを大事だと考えていた。この気づきについて、指導者である神戸大学の林准教授と広島大学の永田准教授に報告したところ、文献型研究と実験・実習型研究に二分して指導するという方法がよいというアドバイスをいただいた。文系・理系の教科による分類ではなく、理科で科学史を研究するのならば文献型となるし、地理歴史・公民科で統計的な手法を用いた研究をする場合は実験・実習型となる。この気づきをもとに、2・3年次生での課題研究の指導体制について見直しを進めており、この分類を生かして、教科を横断した指導とする予定である。「探究的な学習」のどの部分に時間をかけるかを意識的に調整することができるため、探究の質がより深まると考えている。

今年度の各学年の取組については、以下のとおりである。

(1) 1年次生「産業社会と人間」

2単位で実施する「産業社会と人間」の授業を、地域課題発見・解決演習などを中心として行う「基幹産社」と、表現するためのスキルを中心に身に付ける「表現産社」とに分けて実施した。基幹産社では、自分を見つめ直し、学ぶ意欲を高めるための「学びの扉プロジェクト」や地域課題を探す「フィールドワーク」、地域課題の解決策を考える「福山市プロデュース」などの単元を実施し、探究の基礎となるスキルの育成に努めた。表現産社では、文の構造を意識した「要約演習」や、論理的に表現するための「ディスカッション演習」「小論文演習」「プレゼンテーション演習」を行い、表現のスキルが向上した。探究に必要なスキルを、相補的に向上させることができた。

(2) 2年次生「総合的な学習の時間（誠之ナビ）」

2年次生の「グループ探究」では、仮説の設定や文献の収集・分析などの実践的な研究方法を知り、問いを与えて研究に取り組みさせることで、探究のスパイラルを体験させ、個人での課題研究を行うベースづくりを行った。

その後、3年次生での研究につなげる「プレ誠之ゼミ」として、「グループ探究」で経験した探究のスパイラルをもとに、問いを立て、テーマ設定に取り組んでいる。指導体制については、文献研究型と実験・実習型に二分し、教科を横断した形をとっている。問いから始まる研究方法を経験した上で、個人研究に入ることで、大きすぎる問いではなく、身近なところから課題を見付け、テーマを考えることができている。

(3) 3年次生「総合的な学習の時間（誠之ゼミ）」

3年次生では、課題研究における問いの大切さを示し、問いの立て方を確認した上で、仮説を立てて研究に取り組んだ。先行研究を読み、時間をかけて仮説を立てることで、研究に行き詰まる生徒が減少した。また、研究・発表・論文など各活動についてのルーブリックを事前に示し、取りませることで、成果の質を向上することもできた。特に表現力については、ゼミ形式での少人数の発表、講座内発表会、1・2年次生に向けた発表会などと形を変えて繰り返し行い、自己評価・相互評価等を行うことで、メタ認知能力やプレゼンテーションスキルを向上することにもつながった。

○資質・能力の評価について

「資質・能力」の評価を効果的に行うために、今年度はルーブリックの事前提示とアウトプット回数の増加に意識して取り組んだ。

(4) ルーブリックの活用

「産業社会と人間」「総合的な学習（探究）の時間」の授業において、ルーブリックをどのような形でどのような時期に評価に用いれば、探究の深化や資質・能力の伸長につながるかを検討し、活用することに努めた。ルーブリックを単元の最初に提示し、それをもとに活動に取り組みせ、評価に活用することで、どのような段階に到達すればよいかを意識させることができた。特に3年次生においては、仮説設定や論文作成など、それぞれの場面に合ったルーブリックを作成することで、生徒にとって到達点が意識しやすくなり、相互評価をする際にも明確な基準で評価やコメントをすることができた。

(5) アウトプットの増加

発表や論文の作成など、アウトプットの回数を増やし、自分の研究を客観的に見直す機会を設けた。少人数のグループでの発表から講座内での発表、さらには1・2年次生対象の発表会へと対象を変えて何度もアウトプットすることで、表現力とメタ認知能力の向上につなげることができた。

(6) 評価の年間計画の作成

資質・能力の評価に取り組む中で、評価を活用することで指導内容も充実し、生徒の学習活動もスムーズに行えることが分かった。年間の様々な評価のバランスを確認し、意図的に配置する必要がある。誰が評価を行うか（教員評価・相互評価・個人内評価など）、どのタイミングでどのような評価を行うか、何を目的とした評価を行うかなどを整理し、生徒の力を付けるための評価の年間計画を作成し、3年間での評価の全体の流れを確認した。

今年度の成果と課題

(1) 成果

3年間の探究のスパイラルを意識したカリキュラム改善に取り組んでおり、特に1年次生において、探究を深めるためのスキルを向上することができた。2・3年次生での課題研究の指導体制についても、見直しを進めており、現在の系列（教科）型ではなく、文献研究型と実験・実習型に二分することで、教科を横断した指導とする予定である。資質・能力の評価については、3年次「誠之ゼミ」において、研究のそれぞれの段階のルーブリックを示し、自己評価や相互評価を行うことで、研究の深まりや表現力の向上が見られた。学校評価アンケートにおいて、「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」を通して、「学ぶ意欲」が向上したかという問いに対して、平成30年度81.5%から令和元年度86.8%に向上しており、意欲の向上も見られる。また、2年次生の変容を見ると、特にどの資質・能力についても、70%以上の生徒が向上したと答えており、「探究的な学習」の効果が見られた。

(2) 課題

生徒の活動に対する評価方法や、生徒の変容の見取り方、それを受けた指導改善について検証し、生徒の資質・能力の向上に結び付けるための評価計画を作成したところ、2年次の仮説設定や文献収集の部分での評価が配置されておらず、アウトプットにつながりづらい部分の評価が難しいことが分かった。この部分の評価をどのように行うかを検討し、来年度の計画に配置していきたい。また、このような取組を学校行事や教科の学習にもつなげていきたい。

次年度の目標及び取組内容

学習指導要領や大学入試など社会の変容に合わせて、大きく変わる時期でもあり、全体の流れを「産業社会と人間」「総合的な学習（探究）の時間」に反映して、自律的に探究できる生徒の育成に努めたい。

また、次年度からのBYODの導入により、「産業社会と人間」においては、情報機器の活用も必要となる。社会で必要とされる資質・能力を育成するために、メディアをどう利用するかは重要な鍵であり、年間計画に位置づけて、探究を深めるための仕組みを作りたい。

2年次生に導入予定の「グローバル探究」では、SDGsを切り口として外国語科や地理歴史・公民科、数学科、理科、家庭科、情報科などの内容を取り入れ、教科横断的な学習を行う予定である。選択制の授業やそこでの成果を参考にして、「総合的な探究の時間」での探究方法とリンクさせて、探究学習の効果を高めていきたい。また、作成した評価計画をもとに、回数や対象・方法・時期などを工夫して年間でバランスのとれた評価を実施し、それによって生徒のメタ認知能力を向上していきたい。